

『松花堂画帖』の刊行と諸本

YAMAGUCHI, kyoko / 山口, 恭子

(出版者 / Publisher)

法政大学国文学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

日本文学誌要

(巻 / Volume)

81

(開始ページ / Start Page)

12

(終了ページ / End Page)

25

(発行年 / Year)

2010-03

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00010196>

〈論文〉

『松花堂画帖』の刊行と諸本

はじめに

近世における出版文化の発達は、古典から当代の作品に至るまで、様々な文学作品を世に普及させた。そしてまた、文学のみならず色々な芸術・学問等が、印刷を介して開放されることとなった。

近世初期、寛永文化の時代に生きた松花堂昭乗（天正一二年（一五八四）―寛永一六年（一六三九））も、没後、商業出版の成熟とともに広く迎えられるに至った人物である。真言宗の僧侶であった昭乗は、石清水八幡宮瀧本坊の住持をつとめる一方、書、絵画、茶の湯など諸々の芸術分野において活躍、また連歌や紀行文など文芸作品も残した。特にその書は弟子らに受け継がれ、瀧本流、松花堂流などと呼ばれて、やがて広く学ばれてゆくこととなる。そうした瀧本流の浸透は、当代における出版

の発達と無関係ではない。昭乗の筆跡は正保二年（一六四五）刊『本朝名公墨宝』下巻に収録されて以降、法帖として数多く模刻、版行されており、それらの出版状況が、瀧本流の盛衰と密接に関わっているのである。こうした書流のあり方は、日本書道史のみならず、文化史や出版史等においてもまた注目すべきものといえよう。

昭乗の芸術作品が開版された例は書だけではない。文化元年二年（一八〇四、〇五）、京の書肆出雲寺より刊行された『松花堂画帖』は、その名が示すように昭乗の絵画作品を中心に模刻したものである。『松花堂画帖』に関しては、矢崎格氏が一九七〇年に「『松花堂画帖』について」において論じられた。『松花堂画帖』諸本間で収録作品に異同があることを示され、また昭乗の画業についても言及された、有益な御論考であった。だが矢崎氏以降、『松花堂画帖』が研究の俎上に載ることはなく、昭乗の肉筆絵画が注目をされる一方で、この画帖については等

山口 恭子

閑視されてきた感がある。^(四)しかしながら本画帖は、近世、特に後半期における昭乗の芸術の受容について知るうえで、極めて重要な資料にほかならない。版本である以上、本画帖には、少なからず当代の人々の昭乗に対する評価や認識が反映されていると思われるからである。

『松花堂画帖』研究の新たな緒とすべく、稿者は矢崎氏の御論考に導かれつつ『松花堂画帖』諸本のさらなる調査を行った。本稿は、そこで得た知見について報告を行なうとともに、伝存諸本の関係等について検討してゆくものである。

一、昭乗の画業と『松花堂画帖』

まず、昭乗の画業、および近世におけるその受容について眺めておきたい。昭乗は、人物、花鳥、山水、仏画に至るまで、様々な絵を残した。水墨画、着色画ともに試みているが、特に「踊布袋図」(出光美術館蔵)などに見られるような、軽やかな筆致の作品がよく知られている。つとに指摘されているように、昭乗は特に宋元画を愛好していた。佐川田昌俊による昭乗の一代記「松花堂行状」^(五)に、「画図は牧谿和尚の風を仰希せられけり」、あるいは「絵は和尚梁楷にも書をくれし」などあることから、昭乗が牧谿や梁楷といった画家たちを思慕していたことが窺える。先述の「踊布袋図」なども、宋元の画題や画風の影響を受けたと思われるものである。

こうした昭乗の絵画は、既に同時代より高い称賛を受けていた。このことを端的に物語るのは、昭乗の作品に寄せられた賛

であろう。その代表的なものに「松花堂画寄合賛」^(六)がある。一卷に仕立てられた昭乗の絵二四図中一九図に著賛せられており、賛者は、近衛信尋、鳥丸光広、江月宗玩、沢庵宗彭、林道春(羅山)、木下長嘯子らであった。さらに昭乗の絵は、彼の没後も人々に愛好されてゆく。谷見氏が指摘されたように、茶会の掛け物として多く用いられていたこともその一例であろう。あるいは、山東京伝『通言総籙』(天明七年(一七八七))に「品川の万千がもつている松花堂のはていは、とんだできのいゝものさ」と綴られたり、喜多川信節『瓦礫雜考』(文化一四年(一八一七))に昭乗の「ちやうちんにつりかねといふ絵」一図が模刻されている例などもある。昭乗の絵が人々に広く認識されていたことが窺えよう。

このように、昭乗の絵は同時代より、そして没後も引き続き受容され、また評価を受けていた。史的に概観してみれば、こうした流れの中で『松花堂画帖』は刊行を見たこととなる。ここで、『松花堂画帖』の概略を示しておこう。既述のように、文化元年、二年に刊行された『松花堂画帖』は、奥付に「松栢堂蔵」と刻されており、出雲寺文次郎の手にかかる。数多く出版された法帖とは異なり、昭乗の絵画集として近世期発兌されたものはこの『松花堂画帖』二編のみであった。しかしながら後述するように明治以降も刊行は繰り返されており、本画帖に相應の需要があり続けたことが分かる。

作品内容に目を向けてみよう。画題は、昭乗が得意とした布袋図はもちろんのこと、人物や動植物、景物など多岐にわたり、また絵だけではなく、江月や沢庵らによる賛や、昭乗筆の自賛

等も共に収録されている。昭乗の画業の全体像を眺め渡しうる構成となっているといえるだろう。その作品数も、諸本によって差はあるものの、文化刊行のもので各帖に三〇図前後、近代に刊行されたものでは三八図を収めるものもあり、充実した内容を有している。加えて、原画に忠実に模刻されていることも特筆すべきであろう。『松花堂画帖』に収録された作品で原画と思しきものを確認しうる例に、昭乗画賛「劉禹錫図『陋室銘』」や同じく昭乗画賛「蘇東坡図『赤壁賦』」（ともに八幡市立松花堂美術館蔵）がある。これらと『松花堂画帖』とを比較すると、いずれも印に違いはあるものの、昭乗の画風をよく生かしていることが分かる。さらに、ほぼ全図を通して、絵の部分は数種の淡い色で、また落款の印部分は朱でそれぞれ摺り出した多色摺りであること、そして伝本がいずれも画帖装であり、見開きで一図を鑑賞できることなども注目すべき点であろう。総じて本画帖は、昭乗の絵画の真面目を伝えるために、実に丁寧に作成されたものであるといえる。

二、伝存本の様相

『松花堂画帖』刊行の状況を探るため、まずは伝存本の分類・整理をしておくこととする。

本画帖の多くは、「文化元年」、「文化二年」の年記を持つ。これらは、矢崎氏も指摘されたように、書名は同じながら内容を異にする別の画帖で、正編、続編というべき関係である。本稿では、文化元年版を正編、文化二年版を続編と称することと

する。

正編・続編について、現在までに管見に入ったものを左にまとめしておく。【 内に便宜上私に付けた略称を記した。】

〈正編〉

国立国会図書館所蔵本（Y R 二一—二二）【国会本】

松浦史料博物館所蔵本（乙一九九—二二七）【松浦本】

東京芸術大学附属図書館所蔵本（貴六—一二）【芸大本】

〈続編〉

国立国会図書館所蔵本（Y R 二一—二二）【国会本】

松浦史料博物館所蔵本（乙一九九—二二七）【松浦本】

都立中央図書館加賀文庫所蔵本（加賀文庫—四四八八）

【加賀本】

お茶の水図書館成簀堂文庫所蔵本

【成簀堂本】

早稲田大学中央図書館所蔵本（特別チ四—五〇二）

【早稲田本】

東京芸術大学附属図書館所蔵本（貴六—一二）【芸大本】

以下、書誌を記す。紙幅の都合上、主な本の書誌を中心に記すにとどめる。国会本は、正編・続編とも原裝白地霞文様表紙（三二・七糎×二一・五糎）。表紙中央の原双辺刷枠題簽に「松花堂画帖」と刻されている（枠・書名共に朱色）。正編巻末には文化甲子秋の年記のある学与斎細合季鷹の跋文が付されている。正編奥付に「文化改元之年甲子季冬 松栢堂蔵」と、続編奥付に「文化二年乙丑晩夏 松栢堂蔵」と刻し、両編とも「松栢堂蔵」の下に朱印「元矩」（出雲寺元矩。瓢箪形・陰刻）がある。松浦本は国会本の正編・続編と、また加賀本・成簀堂本

『松花堂画帖』の刊行と諸本

・早稲田本は、国会本統編と同じ体裁を持つ（成賞堂本・早稲田本は後補題箋）。芸大本は、正編は原装白地雲霞文様表紙、続編は原装白地唐草文様表紙（三一・七糎×二二糎）。題箋や奥付は国会本と共通するが、両編とも、奥付の「元矩」印がない。なお先述のように現存本はいずれも画帖装である。表紙の文様については、芸大本と国会本とで異なるようにバリエーションがある。

さて、『松花堂画帖』は近代に入って二度刊行されている。これらは、文化年間刊行の際用いた版本に、新たに摸刻した絵図を加えて出版したもので、後修本と呼ぶべきものである。矢崎氏は前掲論文において後修本の存在について触れておられないので、これらについても概説しておきたい。

まず一度目は、二帖本として刊行された（以下これを「後修二帖本」とする）。明治末あるいは大正初期のことと思われる。後述の後修三帖本に附載された「松花堂画帖内容見本」において、人見少華氏はこの後修二帖本について以下のように述べておられる。

帖の内容は元年本（稿者注・正編）は学与斎が題跋を併せて書画三十開。二年本（同注・続編）は惺々翁の題字を併せて書画二十九開。後猶ほ遺墨を見るに従つて莫し、数の満つるを俟つて、以て第三編に収めるつもりであつたと見え、当時十有七葉は既に手民の手に上されて居たが、（中略）未刊のまゝに過されて居た。星移り物替り、下つて凡そ式拾年前、第一、二編の再版に後の十七葉を割り合つて二冊本として刊行された。

すなわち後修二帖本は、正編に新たな絵を加えて再編された一帖と、続編に新たな絵を加えて再編された一帖とからなる。これらについては便宜上、前者を「後修二帖本正編」、後者を「後修二帖本続編」と呼ぶこととしたい。なお留意すべきことは、後修二帖本正編、後修二帖本続編とも奥付に「文化改元之年甲子季冬」との年記が刻されている点である。

二度目に制作された後修本は、昭和五年（一九三〇）に三帖本として刊行された（以下これを「後修三帖本」とする）。各帖が「雪」「月」「花」とされている。再び「松花堂画帖内容見本」に寄せた人見氏の解説を引用しておきたい。

今度第三版を企てるについて（中略）再版本の缺處は第三版には之を補はしめた。（中略）第三版は三冊仕立てとし、一、二は文化版をそのままに倣ひ、第三は初版の摺り方を參して萬遺漏なきを期した。

これにより、後修三帖本『松花堂画帖』のおよその体裁を知ることができよう。作品の収録順に若干の違いはあるものの、雪帖は正編と、月帖は続編と同じ作品内容を有し、また花帖は、正編、続編に未収録であつた作品を中心に編纂したものである。

なお後修二帖本は、京都府立総合資料館（特―七二二―一〇七）、大阪府立中之島図書館（ほ六―貴四〇）、京都工芸繊維大学附属図書館（七二―S―二）、京都大学文学研究科図書館（KC―九七二）等に所蔵されている。京都府立総合資料館所蔵本を例に書誌を記しておけば、正編・続編とも、原装灰色地草花文様布表紙（三一・七糎×二二・五糎）を有し、表紙中央の原双辺刷枠題箋に「松花堂画帖」と刻す（枠・書名共に朱色）。

既述のごとく、奥付には両編とも「文化改元之年甲子季冬 松栢堂藏」とあり、また国会本等と同じく「元矩」印がある。さらに正編後表紙見返には朱印「松花堂画／帖発行所／京都市下京区／三条通高倉西へ入／出雲寺松栢堂」(方形・陽刻)が押されている。なお後修二帖本も、諸本よって表紙の色や文様は様々である。

後修三帖本については、法政大学図書館所蔵本(W七二一・一七七)の書誌を記しておく。三帖とも緑色布表紙(三一・九厘×二二・二厘)。表紙左肩の原双辺刷梓題簽に「松花堂画帖雪(月・花)」と刻す(梓・書名共に朱色)。雪帖の奥付は「文化改元之年甲子季冬 松栢堂藏」、月帖の奥付は「文化二年乙丑晚夏 松栢堂藏」で、「元矩」印はない。花帖には、第一開に内藤虎次郎(湖南)の書「出定墨戲」を、さらに巻末に「昭和二年七月」の年記の入る大徳寺四八五世全提要宗(伝衣)の跋を収め、奥付に「昭和四年己巳季冬松栢堂藏」を刻す。三帖とも、後表紙見返に紙片「昭和五年二月廿日印刷納本／昭和五年三月十日発行／発行兼蔵版者 出雲寺富久(中略)／発行所 物部萬象堂内松花堂画帖刊行会」を貼付する。後修二帖本、後修三帖本ともにやはりすべて画帖装である。

なお、「松花堂画帖」は、大正八年(一九一九)に出された芸苑叢書に収録されている。これは後述するように後修二帖本の正編に基づいて縮刷・編纂されたものである。文化元年に刊行されたものよりも多くの絵図を収録しており、また作品の収録順も独自である。後掲「松花堂画帖」諸本対照表」の正編「Ⅰ表」を参照されたい。

三、文化刊諸本の関係

上記の諸本を丹念に見比べてゆくと、収録された作品の数やその順序のほか、一見同じように見える作品の内部にも様々な違いがあることが分かる。諸本の異同を一覧にまとめたものが、後掲「松花堂画帖」諸本対照表」(以下「対照表」)である。

まず、文化年間に刊行された国会本・松浦本・加賀本・成實堂本・早稲田本・芸大本の異同について検討したい。特に、伝本が多く、また異同が種々見られる続編についてひとまずは見てゆこう。「対照表」の続編「Ⅰ表」を見ると、他の諸本に対し、芸大本のみが様相を異にしていることが分かる。芸大本は他の本には収録されない三図(A図〈寒山図・図版1〉・B図〈梅鳥図〉・C図〈福祿寿図〉)を有しており、一方、他の本に共通して収録されている続6図(六祖図・江月賛)・続12図(枇杷図)を収録しない。これらの点で極めて特徴的である。また作品の内部にも異同が目立つ。「対照表」続編「Ⅱ表」に示したように、賛や絵の一部分を欠く(続11図〈黄山谷図・賛。図版2〉・続17図〈菊図・芙蓉図〉)、「昭乗」印が天地逆さまに摺られる(続19図〈書「赤壁賦」〉)、印や署名を欠く(続7図〈鶏図・竹図〉・続8図〈書「愛蓮説」〉・続9図〈周茂叔図〉・続18図〈達磨図・江月賛〉・続20図〈蘇東坡図〉)といった類のものである。矢崎氏は、続編については矢崎氏所蔵本・芸大本・加賀本(日比谷図書館所蔵本)を比較され、「これらの画帖はそっくり同じものはなく、順序も掲載されている図も少しずつ異な

り、(略)同二年本(稿者注・続編)は芸大本と日比谷本が類似している」と述べられた。だがこの見解は、あくまでもこの三本のみの比較により導かれたものである。稿者は矢崎氏本については未見であるが、少なくとも矢崎氏が取り上げられた芸大本・加賀本に、国会本・松浦本・成賞堂本・早稲田本を加えて並べてみるならば、芸大本のみが異系統であり、加賀本を含むほかの本全てが同系統であることが明らかとなる。以下、国会本・松浦本・加賀本・成賞堂本・早稲田本をとりまとめて、「国会本系統」と称することとする。なお早稲田本は、国会本等に比して二図を欠いているが、これは刊行後に切り出されたものである。

一方の正編であるが、正編(Ⅱ表)に示したように、正25図(布袋図・沢庵賛。図版3)が、国会本・松浦本においては印があるのに対し、芸大本では印がないという点でのみ差異が見られる。異同が少なく、また伝本自体が数少ないため、徴証にやや乏しい感はあるものの、この差もまた、正編においても芸大本のみが系統を異にしていることを示唆しているといえる。

さて、この芸大本の存在をどのように捉えるべきだろうか。

国会本系統、芸大本ともに収録された同じ絵図同士を比較してゆくと、線の欠けや磨滅の状況から、芸大本は国会本系統よりも後印であり、むしろ後修二帖本に近い版面を持つものであることが分かる。すなわち芸大本は、国会本系統と後修二帖本の間に位置するということになる。この段階で芸大本が刷られた理由は明らかではないが、国会本系統が世に出た後、『松花堂画帖』が再度刊行されることとなり、その際に作成された

のが芸大本ではなかったかとも想像される。となれば、芸大本の作成が文化年間を下る可能性もある。

人見氏の解説にも触れられていたように、版元の出雲寺には、昭乗の書画、ないしその模写が多く収集されていたのだろう。

新たな『松花堂画帖』を作成するにあたって、いずれの作品を収録するか試行錯誤があったのではないだろうか。A図・B図・C図、および続6図・続12図は、そうした試行錯誤の段階で取捨されたもので、芸大本と国会本系統との収録作品の差は、このような編集状況に起因するものと思われる。なお芸大本の書誌的特徴として、正編・続編とも、奥付における版元印「元矩」がないことも注目される。他の本には備わっているのに比べ、これも極めて特徴的である。先に述べたように、芸大本では、印が天地逆に摺られるという明らかな誤りが見られたり、賛や絵図の一部を欠く、あるいは落款部を欠くといった箇所も多々存する。こうした粗雑ともいえる不備が多く見られることをも考え合わせるならば、芸大本は、印刷こそされたものの、何らかの理由により一般的な出版流通には乗らなかった本と想定しうるのではないだろうか。中野三敏氏によれば、近世後期、画帖装の画譜・絵本は上製本・特製本、対して冊子型は普通本という感覚の隔たりがあったという^三。とすれば『松花堂画帖』は、まさしく特製本としての体裁を備えていることとなる。そうした本が、芸大本のように杜撰な状態のまま公にされるとは考え難い。芸大本と同じ書誌的特徴を有する本は現段階では管見に入らず、少なくとも、これと同種の本はほとんど流布していなかったと考えざるをえない。芸大本は、国会本系統の刊行

後、新たな『松花堂画帖』開版に向けての試し摺りとして成った本であったとも思量される。

四、近代刊諸本の位置づけ

続いて、近代に刊行された三種、後修二帖本・後修三帖本・芸苑叢書本について見てゆく。再び「対照表」を参照されたい。内容に応じ、後修二帖本正編・後修三帖本雪帖・芸苑叢書本は正編と、そして後修二帖本続編・後修三帖本月帖は続編と各々比較してゆくと、近代に刊行された諸本が、文化刊行の本とは著しい差を有していることがわかる。後修二帖本・後修三帖本・芸苑叢書本はそれぞれ、どのように位置づけられるのだろうか。

まず後修二帖本は、前述のように正編を軸に再編した後修二帖本正編と、続編を軸に再編した後修二帖本続編の二帖からなり、さらに、文化刊の諸本には未収録であった一四図が新たに収められている。ここで留意すべき点は、後修二帖本が、芸大本独自の特徴をほぼ全て有しているということである。後修二帖本には、芸大本にのみ収録されていた三図（A図・B図・C図）が収められる。また、各作品内の印や署名の有無といった細かな点においても同様で、芸大本における、印や署名を欠くあるいは作品の一部を欠くといったような一二箇所の特徴のうち、九箇所までを同じくしているのである。なお残る三箇所であるが、その一は正25図で芸大本になかった「昭乗」印があること、その二は続7図で、芸大本にあった「昭乗」印がないこ

と、その三は続19図で、天地逆であった「昭乗」印がないことである。その三は明白な誤りであるため意図的に削除したのであろう。また他の二点についても、さほど大きな差異と考えることはできない。これらのことより、後修二帖本が芸大本、もしくは芸大本と同種の本を主な拠り所として編纂されたことは明らかといえる。

なお、国会本系統には収録され芸大本には収録されていない続6・続12の二図を、後修二帖本は収録している。しかしこの点もまた、後修二帖本編纂の拠り所が芸大本、もしくは芸大本と同種の本であったことを示す徴証となる。後修二帖本続編においては、iからnは第三〇開以降に収録されており、底本にない図は全て巻末にまとめるという編纂方法が明らかであるが、そこに先の続6・続12図もともに収録されているのである。

次いで後修三帖本について見てみよう。雪帖・月帖については、国会本系統の正編・続編の体裁をほぼそのまま襲ったもの。花帖は国会本系統に未収録であった作品をまとめたものだが、すべて先立つ芸大本や後修二帖本には収録されており、それらと同版ということになる。奥付部の「元矩」印はないものの、後修三帖本が国会本系統に連なることは疑うべくもない。

ところで繰り返し述べたように、文化刊の諸本、そして後修二帖本、後修三帖本は、基本的には共通の版本から摺り出されている。「対照表」の「Ⅱ表」に掲げたように、一図中において賛の有無、あるいは絵の片面の有無という異同の見られるものがある（続11図・続17図）が、これらはいずれも賛と絵があるいは左右の絵が、別々の版本に彫刻されていたものと考え

最後に芸苑叢書本であるが、収録作品の順序は異なるもの。後修二帖本正編に収録されたaからhの作品を収録している。すなわち後修二帖本正編を元に複製されたことは明らかである。以上、管見の『松花堂画帖』諸本間の関係について述べてきた。これを図示すればおよそ左のようになる。

昭和五年

後修三帖本

芸苑叢書本

最後に、『松花堂画帖』の刊行に携わった学与斎（細合季鷹）

余たまたま書肆松柏堂を訪ぬ。書画を談ずるに及び、主人に書祖松花尊師の画を出だし名家題賛有るものを示す。且つ余の嘗て蔵する所のものを以て合刻せんことを請ふ。余欣然として画韻瀟洒なるを披閱す。実に奇観とする所な

り。此帖公布せば則ち好事者流の眼目を爽かにせん。乃ち

手摸する所、及び諸友を訪求して獲る所のものを併せ、これを与へて別てば、祖師の書画伝はりて朽ちず。蓋し余の素志を云ふ。文化甲子秋 浪華隱士學与齋細合季鷹識

これによれば『松花堂画帖』は、出雲寺が蔵する昭乗の作品に、
 学与斎が所蔵する作品、さらに摸写した作品、人を訪ねて得た
 作品などを合わせて成ったものであるという。この画帖の刊行
 によって昭乗の芸術を世に広く伝えたいとの学与斎の意向も述
 べられている。

学と齎なる人物については未詳であるが、「書祖松花尊師」とあることより瀧本流門人の一人と考えられ、またその名から

して細合半斎(学半斎とも)の高弟ないし縁者と想定される。細合半斎は「瀧本流中興」と評された瀧本流門人で、瀧本流法帖の刊行に尽力した人物。また漢詩人として高名で、大坂の漢詩結社・混沌社の一員として活躍、詩文集等の著作も多い。その半斎の著作の一つ『隠居放言』(享和三年(一八〇三)序。国会図書館)に、「題^二学与斎墨竹雀^一胎^二馬田氏^一」や「送^二細合与斎翁携^一乃息^二遊^二東都^一」と題した詩が収められている。ここに見える「学与斎」ないし「細合与斎翁」がすなわち、『松花堂画帖』の跋文を記した学与斎細合季鷹のことであろう。また『浪華人物録』茶人数寄者流には「中^二島^一細合与斎」と記されており、学与斎は大坂中之島に住し、茶の湯においても知られる人物だったようだ。学与斎が瀧本流門人で、なおかつ『隠居放言』に見られるように絵画もよくした人物であるならば、『松花堂画帖』編纂にあたって昭乗の書画の模写を行なったことも納得がゆく。さらに昭乗の書画作品を人に乞うて入手しうる立場であったということを考え合わせると、上方において文化的な人脈を持っていた人物と想定される。細合半斎は昭乗の書を多く版行し瀧本流の中興に努めたが、片や学与斎は、昭乗の絵を出版してその画業を世に広く知らしめる役割を果たしたのであった。

さてこの学与斎が出雲寺を訪れた際、『松花堂画帖』の企画・刊行の話が持ち上がったという。出雲寺は京都と江戸に店を構えていた書肆であり、幕府の書物奉行支配の書物師としてよく知られている。宗政五十緒氏が『京羽二重』(貞享二年(一六八五))等の地誌を引きつつ指摘されたように、高価な絵草子類も取り扱っていた書肆であった。『松花堂画帖』の奥付に

押印される「元矩」は、出雲寺の六代目にあたる人物である。ところで、ここで一つの疑問を提示せざるをえない。宗政氏の紹介される「京都出雲寺家由緒書」によれば、元矩は享保一五年(一七三〇)に書店を相続した後、安永七年(一七七八)に没しており、『松花堂画帖』が刊行された文化初年の出雲寺当主は、元敷なのである。にもかかわらず、なぜ『松花堂画帖』奥付には、「元矩」の印が捺されたのであろう。『松花堂画帖』制作の契機となった出雲寺所蔵の昭乗の作品が、ことさら元矩の愛蔵であったかとも推測されるが、現段階では判然としない。ともあれ、跋文からは、出雲寺に昭乗の絵画作品が少なからず所蔵されていたことが窺える。ちなみに、既に指摘のある如く出雲寺は林羅山の縁者であったとも伝えられる。昭乗と羅山とは様々な場面において親交を結んでおり、羅山は前掲「松花堂画寄合賛」に著賛しているほか、昭乗の絵図に対し詩を著すなどした。出雲寺と羅山とが縁者であったとの説に従うとすれば、出雲寺家の周辺には、羅山を介して古くから昭乗の書画が存していたとも想像されようか。

おわりに

以上、『松花堂画帖』伝本の諸相について明らかにし、それら諸本の先後関係等について検討を行ないながら、刊行の展開をたどってきた。文化元年の年記が入る正編、ならびに文化二年の年記が入る続編ともに流布本である国会本系統と芸大本の二系統が存在すること、まず国会本系統が刊行され、後に芸大

本が刷られたこと、そして芸大本は作成されたものの流通しなかったであろうことを示した。また、近代に出版された後修本についても、いずれの系統に連なるものであるか言及した。すなわち後修二帖本は芸大本に基づいて編纂されており、その後修二帖本正編に拠って芸苑叢書が編まれ、一方、後修三帖本は国会本系統に基づいて編纂されたものである。このように、寛永期に描かれた昭乗の絵画は、近世後期に至って印刷を介しての再現が試みられ、その後、少しずつ体裁を変えながら幾度も上梓されたのであった。

『松花堂画帖』は、冒頭で述べたように、昭乗の絵画の受容や評価を探るうえで重要な資料である。『松花堂画帖』が最初に刊行された文化年間前後は、瀧本流の法帖も多く上梓されている。また、昭乗の紀行文『芳野道の記』が、瀧本流をよくした橘千藤の序文を付して刊行されたのも、寛政五年（一七九三）のことであった。『松花堂画帖』の開版は、この時期の、昭乗の芸術全般に対する需要とも関係していよう。この視点に立つならば、本画帖の存在は、昭乗が近世後期に愛好されていたその理由を探る拠り所ともなるはずである。昭乗の芸術がどのように受け入れられ、そしてなぜ生き延び続けていったのか。今後稿を改めて検討することとしたい。

注

一 拙稿「滝本流の流行と展開——法帖の出版状況を中心に——」

（『法政大学大学院紀要』第四六号・二〇〇〇年）、『本朝名公墨宝』の編纂と受容」（『日本文学誌要』第六五号・二〇〇〇

二年）、「印刷による書の再生——『本朝名公墨宝』の刊行について——」（江戸文学からの架橋——茶・書・美術・仏教——竹林舎・二〇〇九年）等参照。

二 矢崎格氏「『松花堂画帖』について」（『茶湯——研究と資料』二号・一九七〇年）。断らない限り、本稿における矢崎氏の論文の引用はこれによる。なお矢崎氏には、『松花堂画帖』の渡唐天神像図」（『日本美術工芸』四二八号・一九七四年）の御論考もある。

三 昭乗の絵画を中心に特集した美術館の展示として、大和文華館「特別展松花堂昭乗——茶湯の心と筆墨——」（一九九三年）、八幡市立松花堂美術館「松花堂昭乗の眼差し——絵画にみる美意識——」（二〇〇五年）などの例がある。

四 中野三敏氏「江戸文化評判記」（中央公論社・一九九二年）には、『松花堂画帖』についての言及がある。中野氏は「松花堂画帖」を、池大雅「大雅堂画譜」、谷文晁「名山図譜」とともに「近世の画譜を代表するべき栄え」とされている。

五 寛永一六年（一六三九）。大東急記念文庫。

六 もと一巻として伝わるが、現在は分蔵されている。『武者小路』一九三八年八月号等に図版収録。

七 谷見氏「茶会記の研究」（淡交社・二〇〇一年）。谷氏は、江戸期の茶会記録に見える絵画を画家別に分類し、専門画師、禅僧、茶人以外の作品では昭乗の絵が圧倒的に多いことを指摘されている。

八 これらの作品は、八幡市立松花堂美術館図録「松花堂昭乗の眼差し——絵画にみる美意識——」（二〇〇五年）に収録。『松花

堂画帖」においては、「劉禹錫図『陋室銘』」は続編14・15図に、「蘇東坡図『赤壁賦』」は続編19・20図に収録される。

九 松浦史料博物館所蔵本には「松花堂画帖目録」一枚も備わる。

一〇 「松花堂画帖」後修三帖本を制作した松花堂画帖刊行会が、その刊行の際発行したパンフレット。

一一 「国書総目録」(岩波書店)には、大阪府立中之島図書館、京都府立総合資料館に「文化元版」が二帖ずつ所蔵される旨が記されているが、実際所蔵されるのは後修二帖本である。後修二帖本には両帖とも「文化元年」の年記が刷られるため、「文化元版」、すなわち正編が二帖所蔵されるかのように著録されたのであろう。

一二 矢崎氏論文によれば、収録作品数は正編・続編とも三六図、両帖とも年記はない由。矢崎氏が掲げられた諸本異同表に拠れば、後修二帖本に最も近い。

一三 中野三敏氏『書誌学談義 江戸の板本』(岩波書店・一九九五年)。

一四 続15図は後修二帖本のみ江月の印を付しているが、これは注八で触れた「劉禹錫図『陋室銘』」の賛であり、昭乗の印を付すべき作品である。

一五 水田紀久氏、多治比郁夫氏は「細合半斎年譜」(大阪府立図書館紀要)一号・一九六四年)において、「細合与斎」を半斎の同族かと推測しておられる。

一六 多治比郁夫氏「書家としての細合半斎―男山菜・手本の出版・門人たち―」(混沌)一二号・一九八八年)、拙稿「細合半斎と書肆・藤屋弥兵衛―滝本流中興の背景―」(日本文学

誌要)第六三号・二〇〇〇年)参照。

一七 注一五水田氏、多治比氏「細合半斎年譜」。

一八 宗政五十緒氏「書肆 出雲寺のこと」(『京都出版文化の研究』同朋社出版・一九八二年)。

一九 注一八に同じ。

二〇 井上和雄氏「慶長以来書賈集覧」(彙文堂書店・一九一六年)、注一八宗政氏論文。

二一 「羅山林先生詩集」(内閣文庫)巻第七一「三笑図 男山僧昭乗筆」等。

二二 矢崎氏は、昭乗が収集したものを含む石清水八幡宮瀧本坊伝来の茶器類が、幕末に至って「八幡名物」と呼ばれ盛名が高くなることについて、「化政期より幕末に至る時期に松花堂昭乗に対する再評価の気運が高まったのである。その過程で八幡名物の名称と評価がかたまったと考えてよいのではないだろうか」と述べておられる(矢崎格氏「松花堂昭乗と八幡名物」『茶道聚錦』四(小学館・一九八三年)。昭乗の芸術に対する同時代的評価や需要については、書画のみならず、茶の世界等も含め多角的に捉える必要がある。

補記

初校時、国文学研究資料館特別展示「江戸の歌仙絵―絵本にみる王朝美の変容と創意」(二〇一〇年一月八日〜二月五日)に、千葉市美術館ラヴィッツコレクション蔵「松花堂画帖」が展示された。展示図録の解説(鈴木淳氏)によると、千葉市美術館ラヴィッツコレクションには、「松花堂画帖」出版願ひ出に際しての写本も所蔵されとのことである。

『松花堂画帖』諸本対照表

凡例

一、Ⅰ表は収録作品、ならびにその収録順を一覧にしたものの、Ⅱ表は作品内容面における異同の詳細を示したものである。いずれも国会本を比較の基準とし、国会本に対して作品内容面に異なる書画については、Ⅰ表の作品番号に「*」を付してある。

一、正編・続編とも、国会本の各開を一図と見て作品番号を私に振る。

(一) 作品番号は、正編・続編の別を示す漢字と、国会本における所収順を示すアラビア数字とから成る。

(二) 対校諸本列における作品番号は、上記の作品番号に準拠している。

一、国会本に収録されない作品については、アルファベットで作品番号を示すこととする。芸大本、および後修二帖本・後修三帖本に収録される三図をA・B・Cとし、後修二帖本・後修三帖本に収録される一四図をa・nとする。芸苑叢書本はこのうちa・hを収録している。

□正編

〔I表〕

第三八開	第三七開	第三六開	第三五開	第三四開	第三三開	第三二開	第三一開	第三〇開	第二九開	第二八開	第二七開	第二六開	第二五開	第二四開	第二三開	第二二開	第二一開	第二〇開	第十九開	第一八開	第一七開	第一六開	第一五開	第一四開	第一三開	第一二開	第一〇開	第九開	第八開	第七開	第六開	第五開	第四開	第三開	第二開	第一開	国会本 (松浦本も同)	芸大本	後修二帖本 正編	芸苑叢書本	後修三帖本 雪帖	
-	-	-	-	-	-	-	-	正30 (学与斎跋)	正29	正28	正27	正26	正25	正24	正23	正22	正21	正20	正19	正18	正17	正16	正15	正14	正13	正12	正11	正10	正9	正8	正7	正6	正5	正4	正3	正2	正1					
-	-	-	-	-	-	-	-	正30	正29	正28	正27	正26	正25*	正24	正23	正22	正21	正20	正19	正18	正17	正16	正15	正14	正13	正12	正11	正10	正9	正8	正7	正6	正5	正4	正3	正2	正1					
正30	正29	正28	正27	正22	正23	正20	正10	正12	正11	正9	正18	正7	正21	h	g	f	e	d	c	b	正26	a	正25	正24	正17	正16	正8	正6	正19	正5	正13	正14	正4	正3	正2	正1						
-	-	-	正30	正29	正28	正27	正22・正23 (二図を一開に 収録する)	正20	正10	正12	正11	正9	正18	正7	正21	h	g	正24	e・f (二図を一開に 収録する)	正16・正17 (二図を一開に 収録する)	正6	d	c	b	正26	a	正25	正19	正5	正13	正14	正4	正8	正3	正2	正1						
-	-	-	-	-	-	-	-	正30	正27	正28	正29	正26	正25	正24	正22	正23	正21	正20	正19	正18	正17	正15	正14	正13	正9	正12	正11	正10	正8	正7	正6	正5	正4	正3	正2	正1						

Ⅱ表

正25図	国会本・松浦本 後修二帖本 正編 芸苑叢書本 後修三帖本 雪帖	芸大本
	印「昭乗」。	印なし。

第三八開	第三七開	第三六開	第三五開	第三四開	第三三開	第三二開	第三一開	第三〇開	第二九開	第二八開	第二七開	第二六開	第二五開	第二四開	第二三開	第二二開	第二一開	第二〇開	第一九開	第一八開	第一七開	第一六開	第一五開	第一四開	第一三開	第一二開	第一一開	第一〇開	第九開	第八開	第七開	第六開	第五開	第四開	第三開	第二開	第一開	国会本 (松浦本・加賀本・成實堂本も同)	早稻田本	芸大本	後修二帖本統編	後修三帖本月帖																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																												
-	-	-	-	-	-	-	-	-	統29	統28	統27	統26	統25	統24	統23	統22	統21	統20	統19	統18	統17	統16	統15	統14	統13	統12	統11	統10	統9	統8	統7	統6	統5	統4	統3	統2	統1						-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-

(注) 芸大本 続6図、続12図なし。
早稲田本 続16図、続18図なし。

Ⅱ表

	国会本・松浦本・加賀本・ 成賀堂本・早稲田本 後修三帖本月帖	芸大本	後修二帖本続編
続2図	左詰めに刷る。	右詰めに刷る。	芸大本と同。
続7図	印「惺々翁」「昭乗」。 印「惺々翁」は竹図の左方。	印「惺々翁」なし。印「昭乗」は竹図の右方。	印一顆もなし。
続8図	印「松花堂」「昭乗」。	印なし。	芸大本と同。
続9図	印「良」。	印なし。	芸大本と同。
続11図	賛あり。	賛なし。	芸大本と同。
続14図	署名「惺々翁」、印「松花堂」。印「松花堂」は「惺々翁」の下方に位置する。	署名「惺々翁」、印「松花堂」のほかに印「良」あり。印「松花堂」のみ右方に大きく逸れて位置する。	芸大本と同。
続15図	印「惺々翁」「昭乗」。	国会本と同。	印「折脚鎗」「宗玩」。
続17図	左面に菊図、右面に芙蓉図。	右面の芙蓉図のみ。	芸大本と同。
続18図	署名「隠士松花堂」あり。	署名「隠士松花堂」なし。	芸大本と同。
続19図	印「昭乗」天地正しく位置する。	印「昭乗」天地逆さま。	印「昭乗」なし。
続20図	印「良」。	印なし。	芸大本と同。
続26図	印「良」図の左上に位置する。	印「良」図の左下に位置する。	芸大本と同。

後修三帖本 花帖

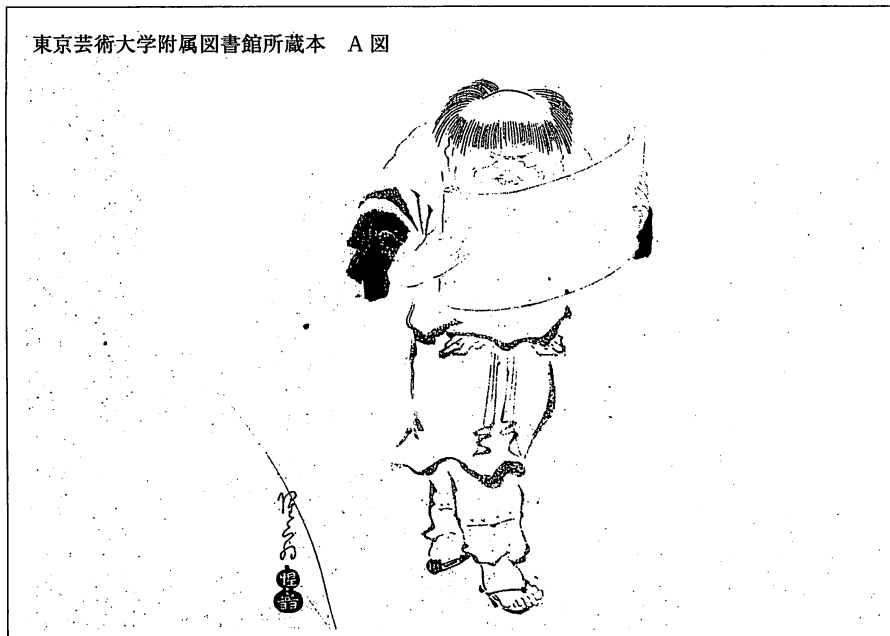
	後修三帖本 (花帖)
第一開	内藤虎次郎書
第二開	C
第三開	B
第四開	m
第五開	l
第六開	i
第七開	A
第八開	b
第九開	c
第一〇開	d

第一開	k
第二開	a
第三開	j
第四開	e
第五開	f
第六開	g
第七開	h
第八開	n
第九開	跋

(注) 跋は、後修三帖本刊行時のもの(年記「昭和二年」)。

図版 1

東京芸術大学附属図書館所蔵本 A 図



図版 2

国立国会図書館所蔵本 続11図



東京芸術大学附属図書館所蔵本 続11図



図版 3

国立国会図書館所蔵本 正25図



排世見之一物と号
是时引袋剥瑠珠
人心塵故亦能感
澤上凡行中有号
但心葛草切賛
非野

東京芸術大学附属図書館所蔵本 正25図



排世見之一物と号
是时引袋剥瑠珠
人心塵故亦能感
澤上凡行中有号
但心葛草切賛
非野

(やまぐち きょうこ・本学兼任講師)